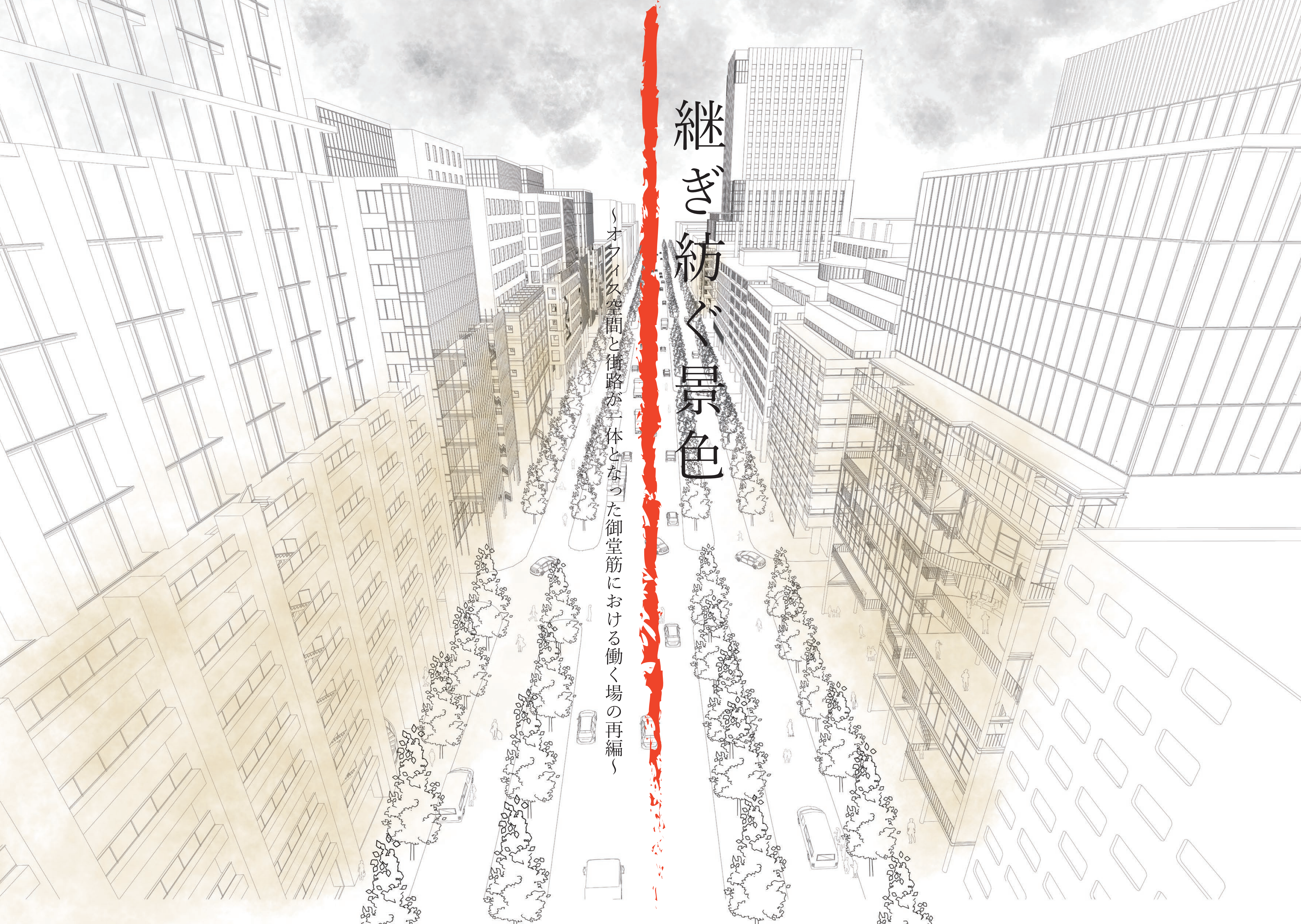


継ぎ紡ぐ景色

「オフィス空間と街路が一体となった御堂筋における働く場の再編」

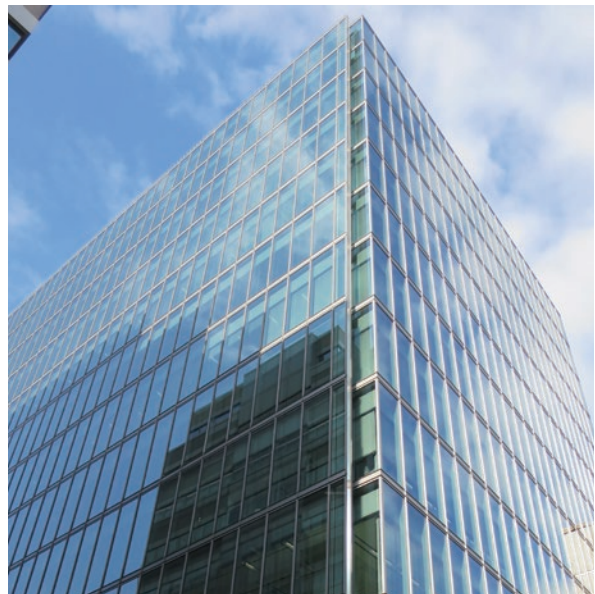


金継ぎは日本ならではの修復技術。

継ぎ目に金、銀、朱色などで装飾を加えて傷痕を「景色」として楽しむ。



傷をなかったことにするのではなく歴史として受け入れ、新しい調和を生む。
新たな命を吹き込むかのように。
それをアナロジーとし制作を進めた。



閉じられた窓

近年、パンデミックの影響により近代以降のオフィスでの労働についての問題が顕在化し、都市の脆弱さも垣間見れるようになったのではないだろうか。パッケージ化されたビルに押し込まれてきた中で労働者は解放される。

パンデミックの影響により今までの働き方を考えるきっかけとなった。リモートワークを経て対面で集まることの重要性に気づいたのではないか。働く者同士、お互いに共同体のような意識が芽吹き、それを感じるからこそ集まって働く意義があるのではないか。



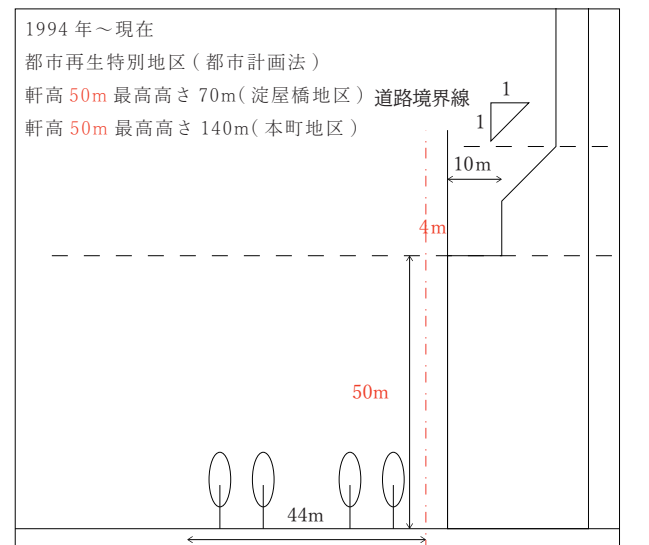
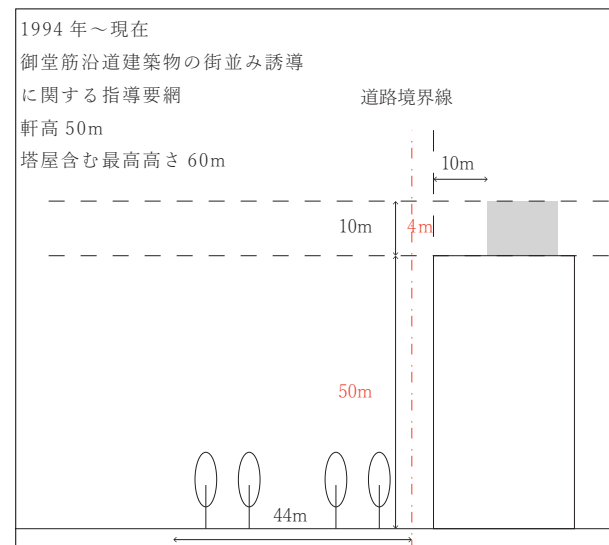
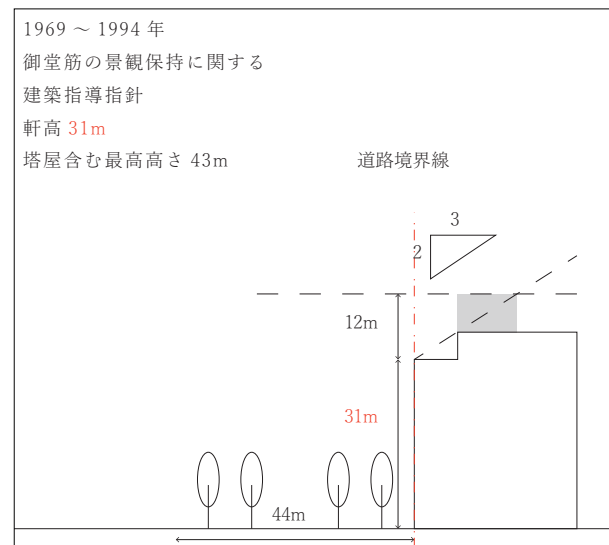
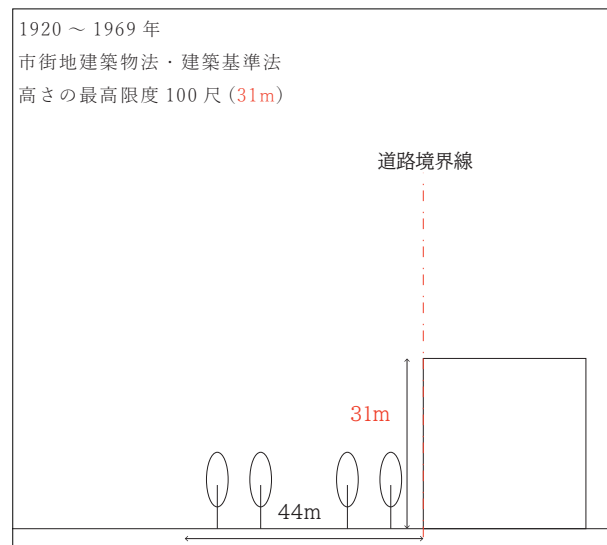
御堂筋航空写真



自ら開閉できる窓

敷地は御堂筋、淀屋橋～本町地区を選定。淀屋橋本町地区は比較的軒線と壁面線がそろった沿道建物の連続的なスカイラインそして高幅員の道路とイチョウ並木がいまて風格のある街並みが形成されている。
かつてのオフィスビルは自分自身の手で窓を開閉できた。内部と外部を繋ぐかどうかは自分の裁量で決定できたのである。時代が進むにつれカーテンウォールのような開閉できない窓が増えてしまった。

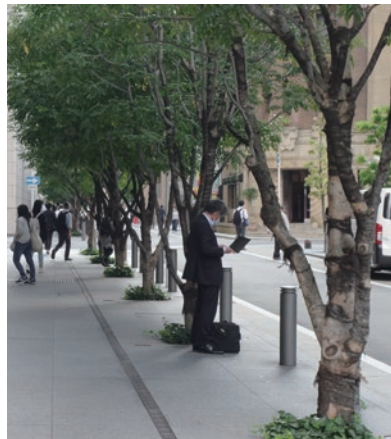
31m で揃っていたスカイラインは消えつつあり 1994 年以降、軒線 50m の建物に建て替えの過渡期にある。31m から 50m の高さに軒高を設定する代わりに 4m セットバックを行った。さらに 50m に揃いつつあったスカイラインは最高高さ 140m まで建設可能としさらなるスカイラインの崩壊が進みつつある。経済性の優先により、長年御堂筋で共有されていた沿道建築物の形態は消え、丸の内のような基壇型の建物が建設されようとしている。



御堂筋の訪問者は多い。オフィス街で観光地である御堂筋はいたるところで特有のふるまいが創出される。



昼食時裏道にあるキッチンカーを並んで待つ人



打ち合わせのために立ったままパソコン触りながら待つ人



冬の期間限定のイルミネーション。観光客など賑わう。

御堂筋は先述したとおり、軒高 31m と軒高 50m の 2 種類のビル高さが混在しており街路と建物の関係は異なる。



壁面と歩道面と街路樹によって形成されたプロポーションは心地よい空間となっており、建物 1 階部分は街路にふるまいを創出する仕掛けとなっている。



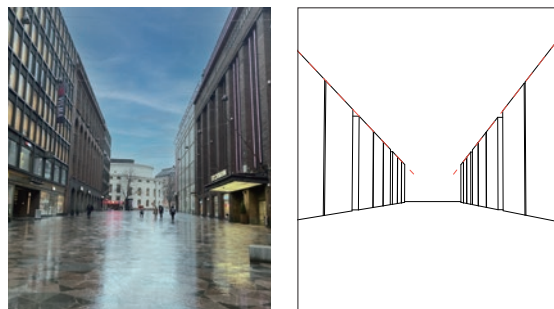
1 道路境界線から 4m セットバックすることとなっており、その幅 4m の空間は庇や木陰がないため使いづらい状況にある。

世界の街路と御堂筋を比較し重厚があり整った街路の特徴を抽出し以下にまとめた。

主な特徴として、1. スカイラインが揃う 2. 街路の幅員と高さの比 (D/H) が 1 より大きい 3. 壁面が揃う 4. 横長な壁面の 4 つが挙げられた。

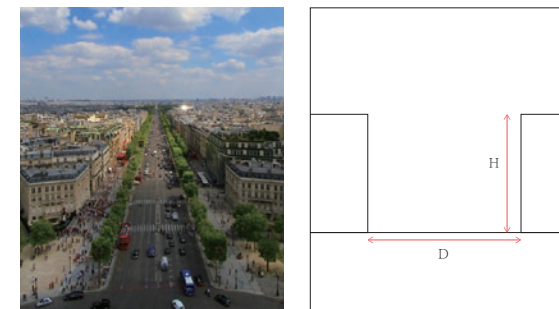
これらの特徴が街路の美しさに寄与し、街路にその街特有のふるまいを創出する。

1. スカイラインが揃う



建物の軒高または最高高さが揃うことが条件となる。スカイラインが揃うことで空と建物の境界が現れる。建物同士で高さを共有しているので街路に一体感が生まれる。

2. D/H > 1



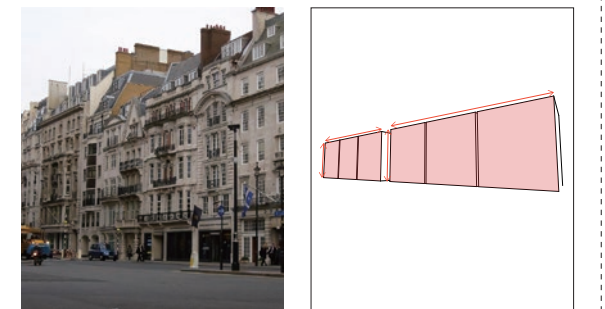
D/H の大きさでその道の印象が変わってくる。D/H ≤ 1 の場合その道の印象は圧迫感を感じる。それに対し D/H > 1 は広々としたゆとりを感じる印象となる。

3. 壁面が揃う

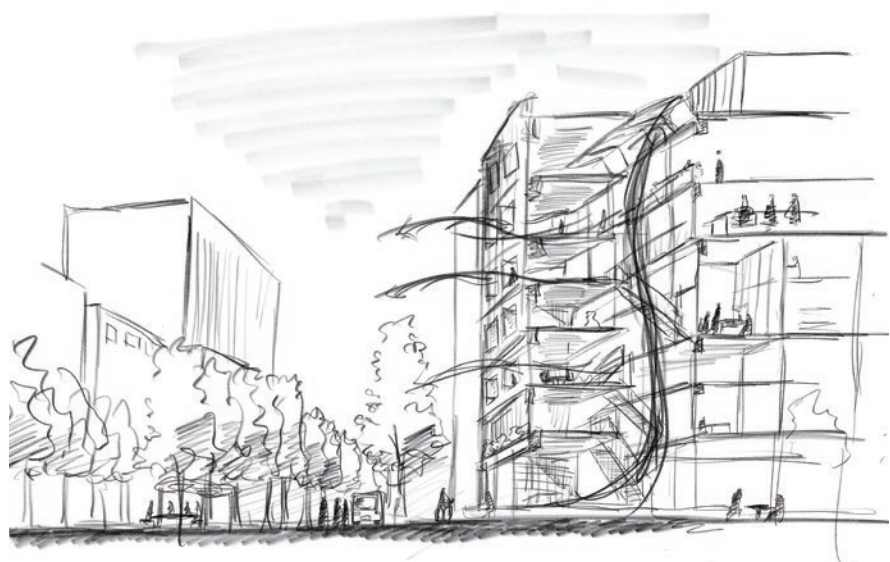


壁面が揃うことで道路と建物の関係がハッキリする。また揃った壁面により人々のふるまいがより強調される。

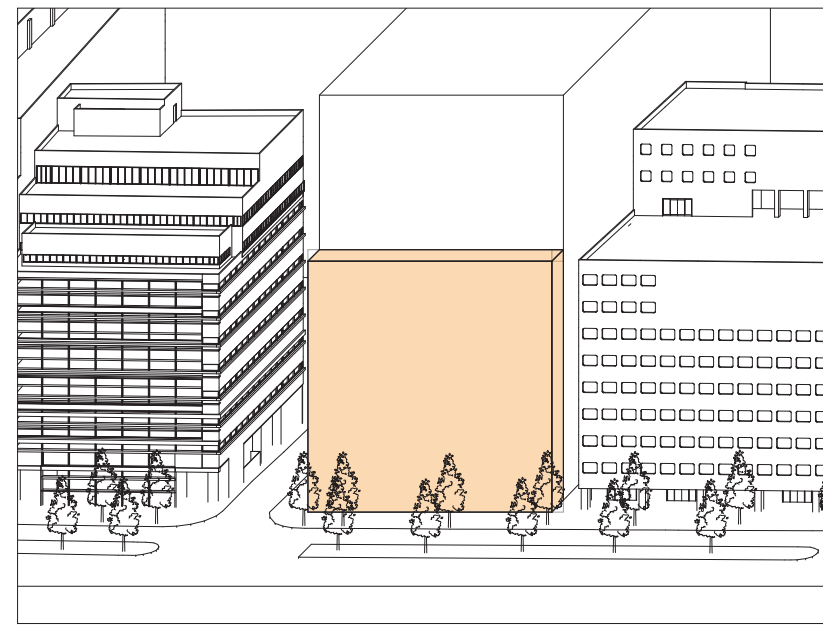
4. 横長な壁面



建物高さと間口の関係で建物の印象は変化してくる。高さに対して間口が小さい場合、隙間に入り込んだ窮屈な建物の印象となるがそれに対し、間口が広い建物はゆったりとした印象を受ける。

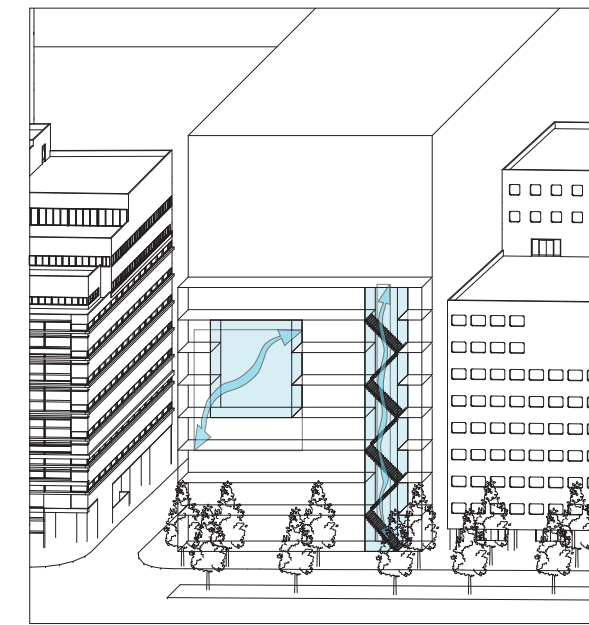


大阪は温暖なモンスーン気候であり年間を通じて外部空間は心地よい時期が長い。また御堂筋の幅員の大きさ、建物の高さやイチョウ並木といった周辺環境の利点が大きい。金融機関や大企業が集積しているため御堂筋沿道外からの訪問者が多い。御堂筋内外問わず対面で働く人に対して**オフィスの側面と街路の側面の2つのアプローチ**によって御堂筋の働く環境を再編する。

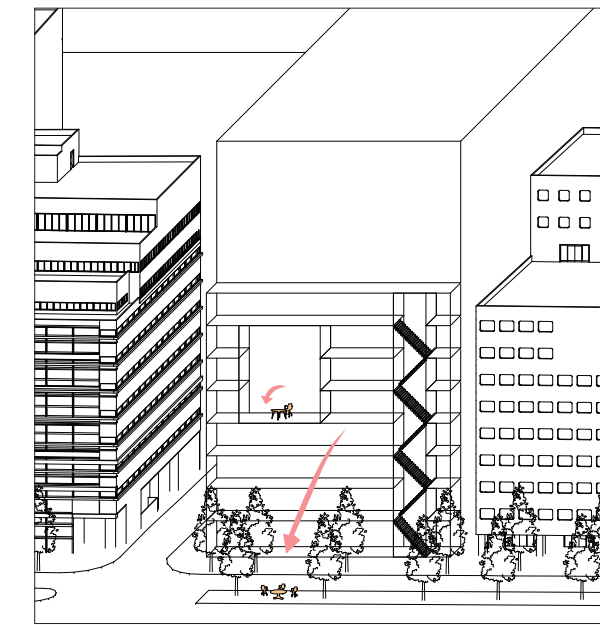


金継ぎをアナロジーとして**軒高50mの建物にその間口の幅×奥行4m×高さ31mのヴォリュームを挿入する**。

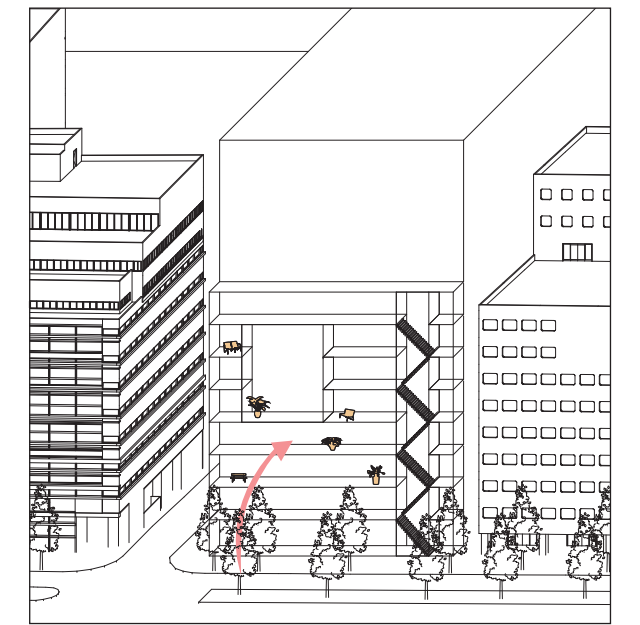
そうすることで軒高31mのスカイラインが揃い、壁面が揃い、見かけの壁の横長さが再生する。既存の31mの建物を間接的に浮かび上がらせ、オフィス空間と街路空間が分断している裂け目に金を施すように計画を行う。



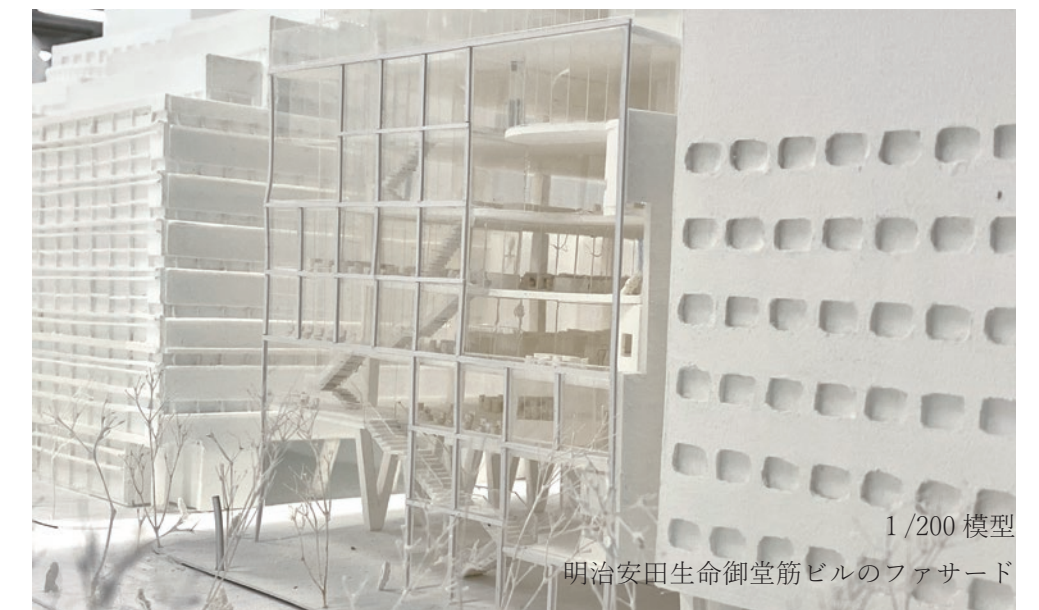
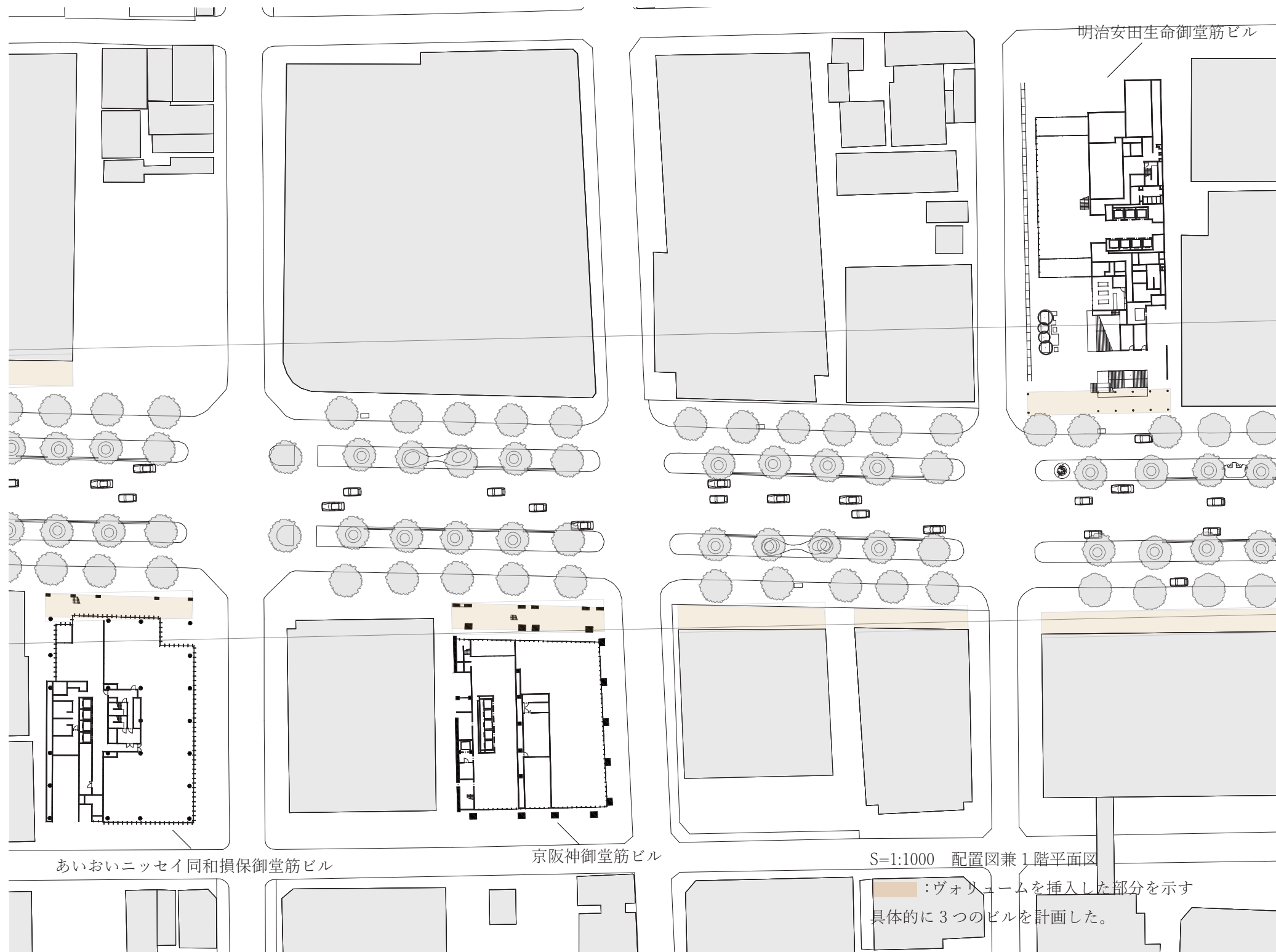
外部と内部を建具や階段で内部をつなぐことで**オフィスと街路のアクセシビリティを高める**。また異なる階で働く人同士で顔見知りとなり、コミュニティが形成され働く人たちの共同体が構築される。

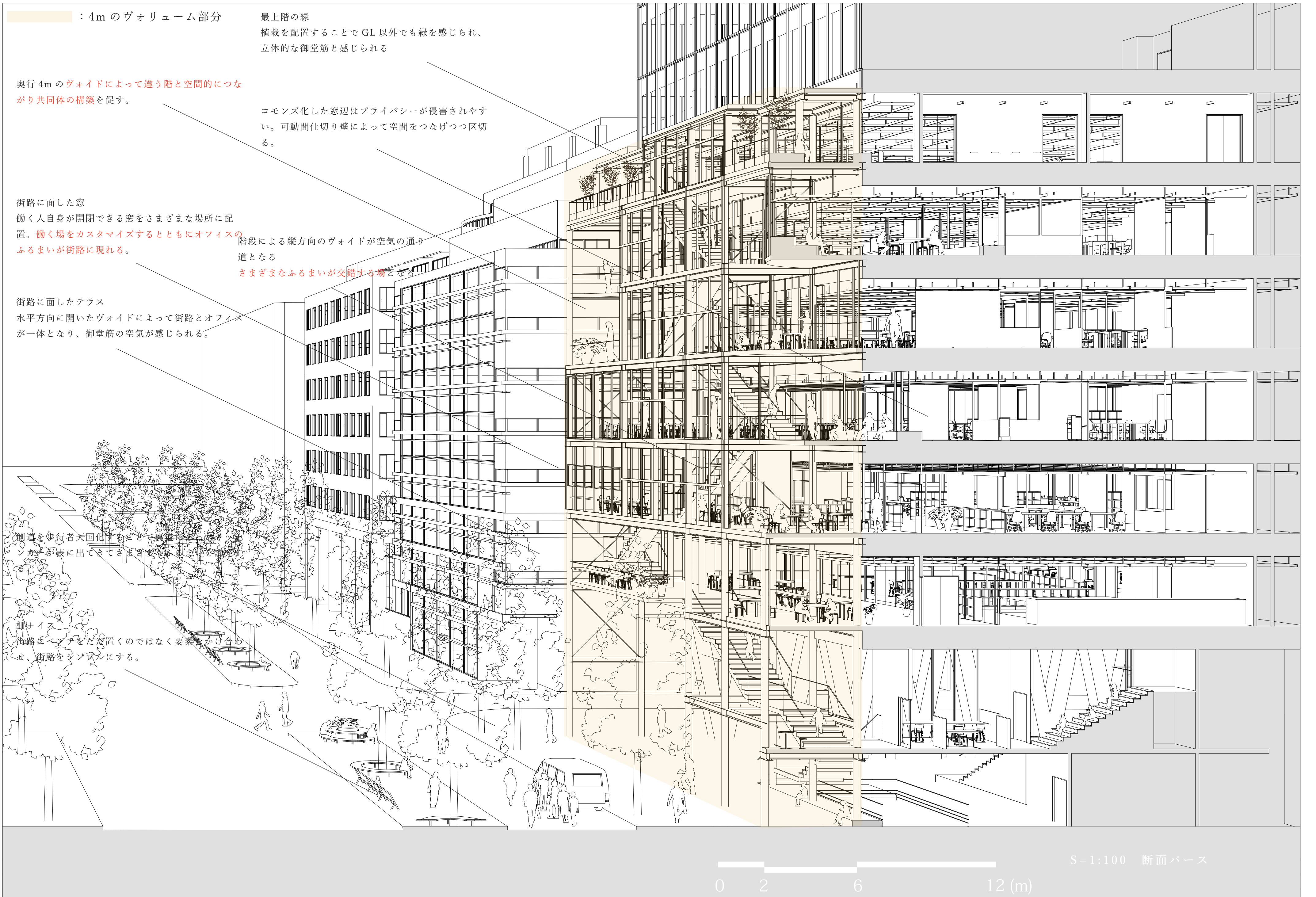


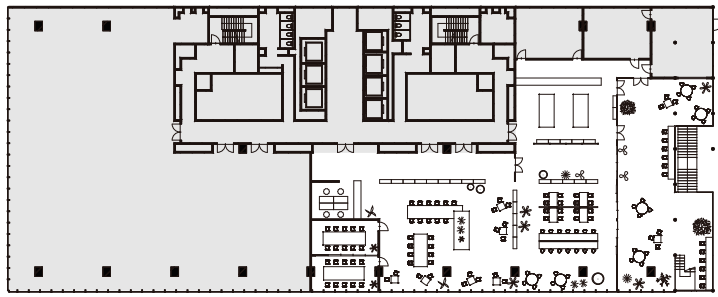
カーテンウォールなどでパッケージ化された**オフィス空間を外部に解放することで自分の働く場所をカスタマイズできるようになる**。個人ブースや会議スペースやリフレッシュルームなどを配置し知的生産性の向上を促す。



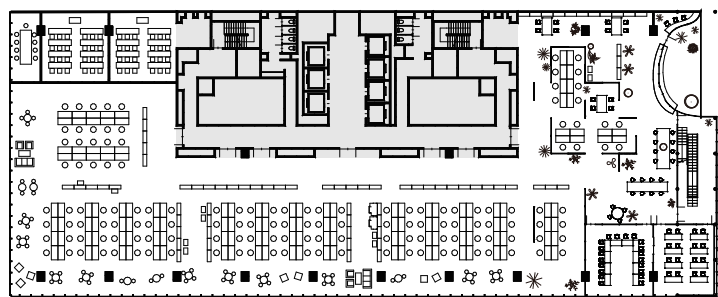
街路はイチョウ以外にも電話ボックス、郵便ポスト、バス停等がある。それらをヴォリューム内またはオフィス空間に挿入することで**街路の特徴をよりシャープにし魅力を引き立てる**。



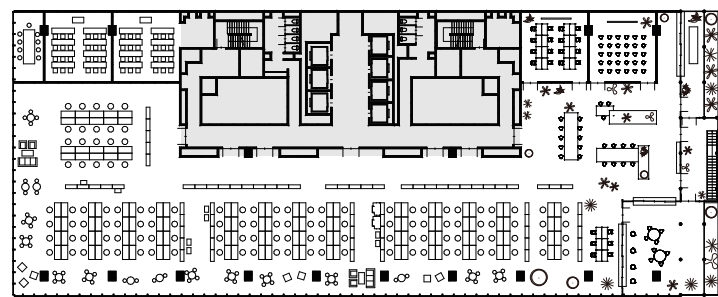




3F PLAN S=1:800



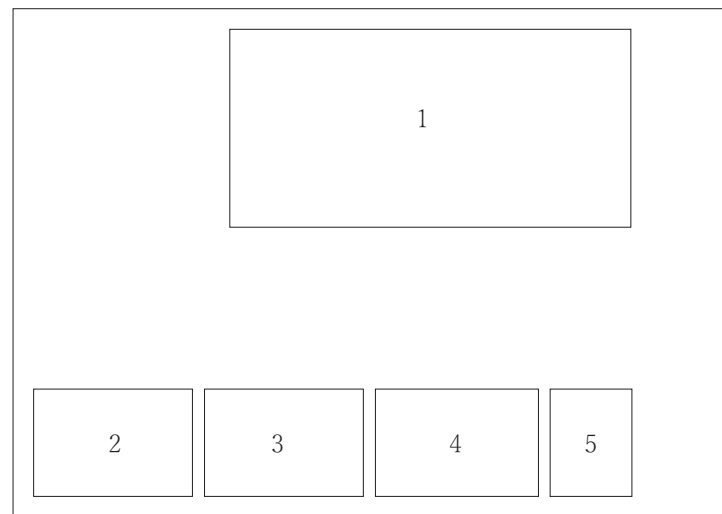
5F PLAN S=1:800



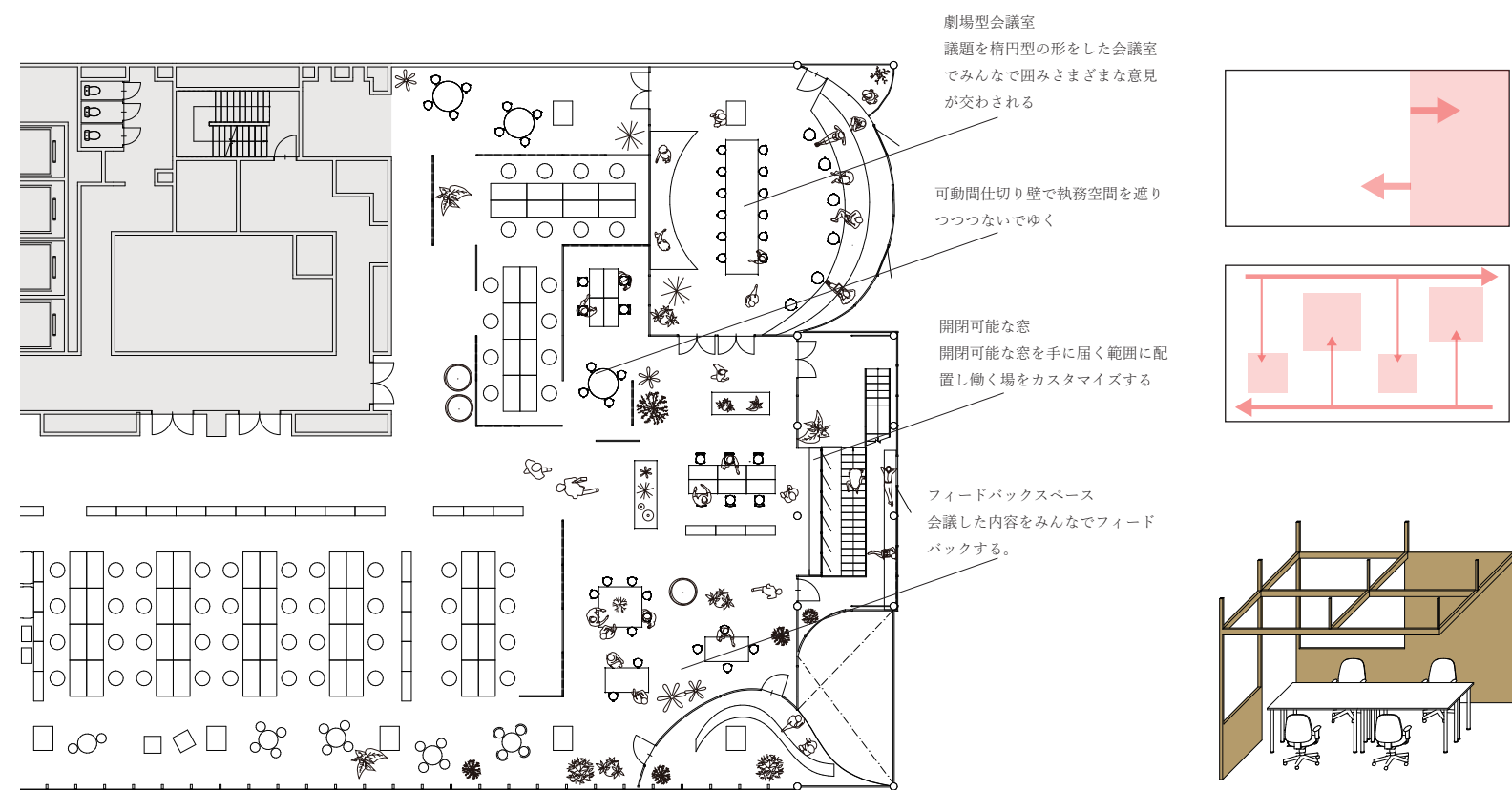
8F PLAN S=1:800



自らの手で開閉できる窓
挿入した 4m のヴォリューム
は街とオフィスの関係を再構
築する。外部に面する窓を自
分自身の手で開ける。そうす
ることで自分の働く場をカス
タマイズ出来るようになる。
自分の意思でカスタマイズで
きる職場に愛着が湧く。
吹抜は風を通し、光を注ぐ。
異なる階とのつながりを生
み、働く者同士の共同体を構
築する。4m のヴォリューム
は人と外部環境をつなぐバッ
ファとなる。



- 1 : 6F 窓辺から 4m のヴォリュームを見る
- 2 : 7F 劇場型会議室
- 3 : 7F 間仕切り壁によって分節するオフィス
- 4 : 6F 吹抜部分から御堂筋をみる
- 5 : 4m のヴォリューム部分から南を望む



7F PLAN S=1:300

プライバシーとコモンズ
4m のヴォリュームを挿入
することで、オフィス環境
の改善などさまざまな利点
があるもののプライバシー
が侵害されやすい。

8mのモジュールのカーテ
ンレールに沿って間仕切り
壁で空間を分節することを
考えた。また、壁の高さを
二種類にすることで空間分
節に可変性をもたせる。



小さな操作で大きな影響を
与えることを注意し計画を
試みた。戦後直後の建物は
その街ならではの特徴づけ
るものであるが、保存され
づらい状況にある。今回の
計画はそのような建物を間
接的に保存の意識に向けさ
せ、今後成熟していくであ
ろう御堂筋の街並みと文化
に向けたものである。